14 Killing Me Softly——俺たちのNHS

九月からずっと、頭が痛いと連合いが言っている。

咳をしたり、クシャミをしたりするときが大変だそうで、両手で頭を押さえてないと耐え難い激痛が走るらしい。

「そんなに痛いなら、医者に行くしかないでしょ」

と言い続けているのだが、そのままである。連合いがモノグサで病院に行くのを嫌がるからではない。病院に到達するまでの経緯が茨の道すぎるからである。

英国の医療制度というやつは、大まかに分けてNHS（国民保健サービス）とプライベート（民間医療施設）の二つに分かれる。で、早い話が、自分でお金を払って治療を受けられる人はプライベートを、無料で治療を受けたい人はNHSを利用することになる。

このNHSについては、『花の命はノー・フューチャー DELUXE EDITION』（ちくま文庫）に収められた文章の中で、どれほど利用するのが困難かということを書いたことがある。だいたい、NHSという医療制度は、日本人であるわたしには最初、謎のシステムであった。日本なら、膝が痛ければ整形外科へ、胃が痛ければ内科へ、体に湿疹ができたら皮膚科へというふうに最初から行きたい病院に行く。が、NHSの場合は、まず自分が登録している地域の診療所に行って、GP（ジェネラル・プラクティショナー）という、ほんとにジェネラルに何でも診てくれる（まあだいたいは話を聞くだけの）主治医に診てもらわねばならない。

で、そこでGPが「ありゃ、これはマジで専門医の診断が必要かも」と判断すれば、外科、内科、皮膚科、耳鼻咽喉科などの専門医へ紹介状を送ってくれて、専門医から患者に「この日に貴様の予約を入れておく。予約日時変更を望む場合は電話してきやがれ」みたいな手紙が来る（注：文面はこの通りではない）。で、ここまでですでに二カ月ぐらいの月日が過ぎているよというのが十年前の話だったが、じつはあれから事態はさらに悪化している。

例えばうちの近所の診療所。ここでGPに診てもらうアポを取るためには、朝八時に電話を入れることになっており、みんなが一斉に電話を入れるからいつも話し中で、まるで人気歌手のコンサートのチケットを取るぐらい大変。と書いたのが十年前だったが、これがさらに困難になっている。まず、近所の診療所では、朝八時に電話するシステムが廃止になった。じゃあどうすればいいのかというと、医者に会いたきゃ朝

八時に診療所に直接来いというのだ。おかげで診療所の玄関前にはオープン前から長蛇の列ができている。しかもこれ、八時に診療所が開いたらそのまま診てもらえるわけではない。あくまでも、予約を入れるための列だから、受付で予約を入れたらいったん帰宅して予約時間にまた出直す。寒い冬の朝、老人や子連れのお母さんなんかが毛布を体に巻いたりしてゴホゴホ言いながら並んでいる姿は、どこの発展途上国の人々が医療を求めて列をなしているのかと思うほどだった。

が、それから数年たつと、今度は並んだだけでは診察の予約が取れなくなった。いや、並ぶのは同じなんだが、まずGPと電話で話す予約を取ることになったのだ。つまり、GPが診療の合間にあなたに電話しますから自分で病状を説明してください、そこで本当にあなたがヤバイ状態にあり、実際に診る必要があるとGPが判断したときだけ診察の予約を入れてやりましょう、という、診療所が患者を選ぶシステムが始まったのである。

が、これがけっこう難儀なシステムで、GPは暇ができたときに電話してくるから、「何時頃に電話ください」と時間指定はできない。だから、職場で打ち合わせ中とか、車を運転中とかで電話を取りそこなったりすると、電話をかけ直してもGPはもう次の患者を診ていたりして、話す機会を逃す。つまり、朝早くから診療所の前に並び、受付で医師から電話を貰う約束を取り付けると、その日は仕事を休んで一日ずっと電

話に備えて待機していることにでもしないと、もはや診察予約を入れることすらままならない。

このようにどんどんどん予約が入れにくいシステムを導入しやがるのは、患者を減らすためである。これだけ予約のハードルが高くなると、人々はちょっとぐらいのぎっくり腰や蕁麻疹ぐらいなら我慢するようになる（わたしのことだ）。NHSは「できるだけ病院に来るな」というメッセージをがんがん発信しており、最近では救急車を呼ぶ人も減らすため、「111」という番号を設け、まず電話アドバイザーと話をさせてから救急車が必要かどうか判断する方向に舵を切ろうとしている。

なんでNHSがそんないけずなことをするのかというと、一言でいえばカネがないからだ。政府が二〇一〇年から緊縮財政を始め、NHSへの支出をケチってきたばかりか、NHSの切り売り民営化を進め、その結果かえって前よりNHSの経営状態が悪化している。

そもそも、英国の場合、NHSを使えば治療は無料（ただし、処方薬のみ個人も負担。一律千三百円ぐらい）だが、民間医療施設なら全額負担だ。「無料or全額負担」というのはあまりに極端であり、日本みたいに、どこの病院でも国の保険が使えて一割とか三割とか個人が一部だけ負担するシステムにしたらええやん。とわたしもむかしは考えていた。

が、そのうち、じつはＮＨＳには利便性を超えた側面があるのだということがわかった。ＮＨＳそれじたいが、左派の最後の砦というか、一つのイデオロギーになっているのだ。

終戦直後の一九四五年、英国では、ナチを倒して英国を勝利に導いたチャーチル首相がなぜか選挙で惨敗し、地べたの人々の熱狂的支持を受けて労働党政権が誕生する。この政権が、いわゆる「ゆりかごから墓場まで」の福祉国家時代の英国を築いた。で、その目玉がＮＨＳの設立であった。当時は、庶民が民間の医療商人たちのカモにされ、貧しい子どもや老人が医師に診てもらえずに死ぬこともあった。だから労働党は、ＮＨＳという夢の医療制度を打ち建てた。「病気とは人々が金銭を払ってする道楽ではないし、罰金を払わねばならぬ犯罪でもない。それは共同体がコストを分担すべき災難である」（ｂｙ ＮＨＳ創立の父、アナイリン・ベヴァン）がその発足理念だ。

英国の多くの人々は、米国なんかがしょっちゅう医療保険の問題で揉めている姿を、「野蛮な人たちね」みたいな目で見ていた。英国は収入や人種、社会階層など関係なく誰もが無料で治療してもらえる平等な医療制度を持ち、七十年もそれを維持してきた洗練された国だと考えていたし、それを誇りに思ってきた。

地方の街の地べたレベルでは、もはやＮＨＳは機能していない。

その証拠に、うちの連合いの頭痛も、何カ月たっても治らない。というか、専門医に診てもらうことすらできない。数々の難関と幾度かの失敗（早起きして診療所の列に並びに行ったら、連合いの直前でＧＰから電話を貰う予約の受付が終わってしまった、とか、ＧＰから携帯に電話がかかったときにダンプ運転中で、しかもＦＭで好きな曲がかかって大声で歌ってたので呼び出し音が聞こえなかった、とか）を乗り越え、一カ月かけてようやくＧＰに診てもらう予約を取ったのだが、これがいつものＧＰが休みか何かで若い見習いＧＰにあたって、先方はネットで検索しながら診断しているような体たらくだ。「オッケー、オッケー、たぶんオーライ」と適当なことを言われて鎮痛剤を処方されたが、頭痛は治らない。

ついに、しかたなく連合いは奥の手を使うことにした。じつは彼は癌にかかったことがあるので、何か不安な症状が出たら、癌科に直接電話をかけて相談できるようになっているのだ。連合いは、ＮＨＳの大変な状況を知っているので、頭痛ぐらいで癌科の貴重な時間を使いたくないと言い張っていたのだが、あまりに頭が痛いので、癌科のアポを取った。だが担当医師との予約は九週間後だ。

「癌科の予約が九週間待ちってすごくない？」

とわたしが驚くと、連合いは答えた。

「うん。待ってる間に死ぬ人もいると思う」

二〇一〇年に保守党政権が緊縮財政を始めたとき、英国では平均寿命の伸びがぱったり止まった。「ほら緊縮財政のせいだ！」「だから政府は財政支出を行え！」とわたしのような反緊縮派と呼ばれる人間は嬉々として叫ぶ。が、それは、実際にはこういうことなのだ。一刻の猶予も許されないシリアスな疾患を扱う科でも、医師の診察に九週間待ちである。癌科だぞ。眼科じゃねえんだ。

で、こういうことになってくるとどうなるかというと、やっぱりみんな命は大事なので、民間の病院を使うようになる。ところが、民間医療保険制度に入ってない人たち（民間医療保険を福利厚生として雇用者に提供する企業に勤めてない人たち。つまり、貧民街の人たち。例えば、わが家）は、医療費を一〇〇％支払うことになる。例えば、うちの連合いのように何カ月も頭が痛かったりすると、頭部のスキャンを撮ったほうがいいんじゃないかと思うが、それがいくらかかるかと言えば、

「スキャンとか民間の病院でやったら昔は千ポンド（約十四万円）ぐらいしてたんだよ。いまならたぶん、五百ポンド（約七万円）ぐらいするんじゃねえかなあ」

と連合いはあてずっぽうで言っていたけれども、ネットで調べると、本当に全国的な平均プライスは五百ポンドだった。こんなんだから、最近は貧民街でも医療費破産というか、医療費のために消費者ローンで借金して深刻な状況に追い込まれ、自己破産する人や夜逃げする人なんかもいる。

うちの連合いはステージ4を宣告された癌患者だったくせに、なぜか奇跡的に治った強運の持ち主だ。「ステージ4でもサヴァイヴする人いるんだね」「最初の診断が間違ってたんだろ」と周囲にも驚かれたが、いつまでもその運が続くわけでもないだろう。なんやかんや言って彼も六十二歳のおっさんだ。労働者階級の人間は、ホワイトカラーより早死にすると言われているのだから用心するに越したことはない。

「プライベートでスキャン撮ってもらいな。本の印税をへそくっていたからカネならある。心配すんな」

と言ったのだが、全然スキャンの予約を入れようとしない。痺れを切らしたわたしが予約を入れようとすると、彼は言った。

「余計なことをするな」

「余計なことって何よ。そりゃ、そろそろいつ死んでもいい年ごろだけど、うちはまだ子どもが小さいんだからスキャンしといで」

と言っても、断固として民間の病院にかかることを拒否する。

「だから、カネの心配はするなって言ってるでしょ」

「そういうことじゃない」

「スキャンは痛くないよ。注射じゃないんだから」

「アホか。それでもない」

「じゃあ、なんなのよ」

と問い詰めると連合いは言った。

「いや何か、それじゃ敗けた気がして」

出た出た出た……、と思った。「ハマータウンのおっさん」世代の福祉国家への拘泥というか執着というか「俺たちのNHS」愛が噴出している。が、NHSのほうではもう財源がないから自分のことは忘れてくれ、とこれだけ明らかに人々に言っているのだ。どんだけ愛しても見切りをつけなきゃいけないときもある。ましてや愛のために命までかけてどうするのだ。

最近、ガーディアンという新聞に載っていた記事によれば、NHSで診察や治療を待たされている癌患者の数はやっぱり史上最高になってるらしい。NHSでは、他の病棟がどんなに患者を待たせていようとも、癌病棟だけは、GPから回されてきた患者を十四日以上待たせてはいけないというガイドラインがある。

が、そんなものは法律でも何でもなく、組織内の指針なので、人手が足りないとかインフラが少ないとかで守れない病院もある。現在、イングランド全体で一カ月におよそ一万八千人の人々が、このガイドラインで定められた期間以上の待ち時間を経験させられている。

二〇一八年十一月を例にとれば、GPから癌病棟での診察が緊急に必要と見なされた患者のうち約一万五千人が十四日以内に診察を受けられなかった。さらに約三千人の癌の告知を受けた患者たちが、指針で定められた六十二日以内に治療を始めることができなかった。

「患者がこのような遅延を経験するようになると、癌の診断を受けたとき、待たされたことが病状に影響をおよぼしたのではないかと疑問を持つようになります。このような状況で看護師が患者を安心させるのは難しく、それでなくても彼らが感じている不安やストレスをさらに悪化させてしまいます」と英国看護協会の代表がガーディアン紙に話している。

このような体たらくになってしまったのは、保守党が二〇一〇年に政権を握って、戦後最大級の緊縮財政政策を始めてからだが、うちの連合いが癌の治療を受けたのはその前のことであり、癌病棟が患者を待たせずに運営されていた時代だ。「あの頃、癌にかかったのはラッキーだったね」と連合いはしみじみ言うが、癌にかかるだけで人々の怒りが噴出しても無理はない。

EU離脱の国民投票が行われたとき、「ブレグジットすればEUへの拠出金週三億五千万ポンド（約五百億円）をNHSの資金として使える」という離脱派が流したデマが、離脱派勝利の決定的な要因の一つになった。これは海外でも大きく報道された

し、こんなしょうもないデマに騙された英国人というのはバカなのかと嘲笑されたが、その裏には、このような事情があったのである。「NHSが改善される」と言ったら、英国の地べたの人々にはたとえウソでもすがりつきたくなるような悲惨な状況があるのだ。

入院や手術が必要になったとき、金持ちなら医療費全額負担で民間の病院にかかれる。しかし、庶民にそれは難しい。でも痛いとかつらいとかは耐え難いし、病を放置して死にたくもない。ならばどうするかというと、借金して民間医療にかかり、返済に苦しんだり夜逃げしたりするわけだが、こういう人たちはよく「NHSの待合室は移民だらけ。NHSが移民にハイジャックされている」とか言う。で、英国在住の年数が浅い頃の移民の立場は自分も辿った道なのでよくわかるが、移民は英国人のようにクレジットヒストリー（信用履歴）がないので大金を貸してくれる金融機関がなく、借金して民間の病院で手術したりすることは、したくともできない。だから、どんなに待たされようとNHSにかかるしかない。つまり、NHSを使う移民が増えたというより、英国人が民間医療施設を使うようになったので、移民ばかりがNHSを使っているように見えるということなのだ。

なのに、借金返済に苦しみながら民間医療を使っている英国人は「なんで移民が無料で医療を受けていて、俺らは高いカネを払って民間の病院に行ってるんだ」とか言い出すし、移民は移民で「あんなことを言う英国人は排外主義者」とか言って、例によって社会の分断が深まるのである。

もともとは貧富の差や人種の違い、国籍など関係なく、すべての人を平等に無料で治療するという美しい理念で発足したNHSが、人々の羨望や憎悪や分裂を作り出している現状は皮肉だ。これ、どうしてこんなことになってしまったのかというと、何度も何度もわたしはいたるところで書きまくっているけれども、やっぱりもう一度言うが、緊縮財政のせいである。

英国在住者はすべて無償で等しく面倒見るという太っ腹な国家医療制度に、国家がケチって財政を投入しなくなったから立ちゆかなくなったのだ。で、財政を投入できない理由は「国が借金だらけで破綻するから」という、いつもの新自由主義（a.k.a.「小さな政府最高」主義）のギミックである。

ブレグジットのせいで英国は混迷をきわめているという印象が海外では広がっているが、そのずっと前から末端の地べた社会はボロボロだった。金がないから民間の病院に行けず、NHSでは何週間も何カ月も待たされて医師に診てもらえない、という社会は、これははっきり言って、貧乏人は医師に診てもらえなかった戦前の時代に戻ったということである。

が、わたしのような日本人からすれば、むかしが良すぎたのかなという気がまった

くしないわけでもない。だってわたしなんかは、ＮＨＳから無料でＩＶＦ（体外受精）治療をしてもらって妊娠し、出産もタダだったわけだし、連合いも無料で癌の治療を受けた。もしＮＨＳが存在しなければ、たとえばここが日本だったりしたら、子どももいないし、配偶者は癌で死亡して、天涯孤独の身になっていただろう。わたしに家族がいるのはＮＨＳがあるからだ。だから、子どもは欲しいけどＩＶＦ治療は高すぎて無理と言う日本の人など見ると、自分のラッキーさを痛感する。

かようにＮＨＳの理念は美しく、素晴らしい。英国は、たとえ王室を廃止しても、ＮＨＳだけは守らなければいけないという人々の主張は感動的だし、わたしもそう思うし、是非そうお願いしたい。

しかし、これにしても意地の悪い言い方をすれば、英国内だけでの美しさ、素晴らしさでもある。全世界の人々が無料で医療を受けられるようにでもならなければ、それは「英国に住んでいる人々にとってラッキーなこと」に過ぎない。

「だけど、ＮＨＳをなくしたら、俺らは英国が福祉国家だった頃の遺産をすべて失うことになる。サッチャーに負けたことになる」

と連合いは言う。ハマータウンのおっさん世代は、反サッチャーの気風が強い。彼らが若いときにストやらデモやらで戦った超強力な敵は、いまでも英国やＥＵの新自由主義的政策の中に生きているそうで、メイ首相やマクロン大統領に憑依（ひょうい）しているというのだ。

英国では、先日、ベネディクト・カンバーバッチが前頭部禿げ上がりの特殊メイクでＥＵ離脱キャンペーンの統括責任者を演じた二時間ドラマが放送された。「Brexit: The Uncivil War」というこのドラマの中でも、離脱キャンペーンが使った宣伝用マイクロバスのど真ん中には「ＮＨＳ」と書かれていた。

残留派は、離脱キャンペーンが言っているＥＵへの拠出金をＮＨＳのために使えというのは事実無根のデマだと、データを使ってきっちりと否定した。だが、「じゃあ、ＮＨＳはこれからも良くなることはないのか」という人々の絶望感に対して、「緊縮をやめて政府がもっと財政投入します。絶対に改善します」と言うことができなかった。キャメロン元首相やオズボーン元財務相が残留派のリーダーだったのだから、彼らが一言そう言えばよかったのだ。なのに彼らはそうするどころか、グローバル化の時代には、ＮＨＳのような国家社会主義的なものは時代遅れだと軽視しているかのような印象すら与えてしまったのである。

「My headache is killing me.」

毎日のように連合いは言う。頭痛に殺されるぐらいなら、さっさと金を払って民間の医療施設に行ったほうがいいと思うのだが、どうやらＮＨＳの癌病棟の医師の診察を受けられるまで、九週間も待つつもりらしい。

「NHS is killing you softly.」

「Killing Me Softly」という有名な歌の題名（もちろん、あの歌ではKillingはフィジカルな意味で使われているわけではないが）をもじってわたしは答えた。脇でご飯を食べていた息子がぷっと笑って言った。

「自分の健康とお金と、どっちが大事なの？」

「だから、これは健康と金だけの問題じゃない。もっと大きなものだ。俺はサッチャーにもグローバル資本主義にも負けたくねえし、加担したくもねえ」

と啖呵（たんか）を切った連合いに息子が言う。

「でもサッチャーなんてもう死んだ人でしょ。それに、父ちゃんのそのケチさは、まるで死んだ祖父（じい）ちゃんそのもの」

死んだ祖父ちゃんというのは連合いの父親のことだ。義父は、若い頃はアルコール依存症やＤＶで義母を泣かせたらしいが、アイルランドからロンドンに移住したのをきっかけに起死回生の大変身を果たし、ロンドン地下鉄の夜間線路整備員となり、残業や休日出勤を極限までやりまくる仕事の鬼になった。そして連合いが十八歳のとき、過労死のような亡くなり方をしたという。

アルコールをやめた彼は、酒の代わりに貯金に依存していたのだろう。年がら年中同じ服を着て、毎日シャワーを浴びるのはもったいないとか言ってちょっと臭ったらしいし、たいそう吝嗇（りんしょく）だったので家族全員から嫌われた。が、彼が亡くなったとき、家族はその預金残高を見て驚愕（きょうがく）したのだった。

そのおかげで義母は夫の死後はアイルランドに戻って家を買い、働く必要もなく楽に生きられたのだが、連合いは父親の人生は悲しすぎたと批判的なのだった。

「俺はケチで言ってるんじゃない。これは政治的な問題だ」

と連合いは言うが、息子は笑った。

「いや、父ちゃんケチ。祖父ちゃんに似てる」

「似てるっておめえ、俺の親父に会ったことないだろ」

「会ったことないけど、父ちゃんの話を聞いていると、そっくりだもん」

息子にそうからかわれ、連合いがぼそっと呟（つぶや）いた。

「だからと言って、俺があんな大金を残して死ぬと思うなよ。……労働者階級が必死で働けば貯金できた時代は、もう終わったんだ。いまどきのケチ臭い親父にはもう、奇跡は起こせない」

その物言いが妙にしんみりとした余韻を残したので、何か良からぬことが起こる前兆ではないかという気がしてきて、連合いに内緒で私立病院に頭部スキャンの予約を入れた。当日になったら、適当にだまくらかして連れて行けばいいのだ。

が、あれほど予約確認の手紙を送るのはやめてくださいと頼んだのに、翌日、当該

病院から予約日時を確認する封書が届いた。もちろん連合いの名前宛てで来たものだから、予約を入れたのが早くもバレバレだ。即行で本人からキャンセルを入れられてしまった。

「待ち時間が二カ月を切ったし、俺はＮＨＳに行く」

とあくまでも言い張るのである。この人は、じわじわＮＨＳに殺されるつもりなんだろうか。

「NHS is killing you.」と言うと、連合いが答えた。

「So be it.（それならそれでいい）」

「Killing Me Softly」って実はラブソングなんだよなと思い出しながらわたしは諦めのため息をついた。

だが、連合い風に言うなら、これはＮＨＳよりも大きな問題なのかもしれない。反サッチャリズムも反グローバリズムもＥＵ離脱も、すべては繋がり、絡まり合っているのだ。

ハマータウンのおっさん世代はいま、社会に対して最後の抵抗をしているのかもしれない。

ちくま文庫

ワイルドサイドをほっつき歩け
――ハマータウンのおっさんたち

二〇二三年八月十日　第一刷発行

著者　ブレイディみかこ
発行者　喜入冬子
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
電話番号　〇三―五六八七―二六〇一（代表）
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　三松堂印刷株式会社
乱丁・落丁本の場合は、送料小社負担でお取り替えいたします。
本書をコピー、スキャニング等の方法により無許諾で複製することは、法令に規定された場合を除いて禁止されています。請負業者等の第三者によるデジタル化は一切認められていませんので、ご注意ください。
© MIKAKO BRADY 2023 Printed in Japan
ISBN978-4-480-43890-4　C0195